

日本アルパイン・ガイド協会 創立の言葉

登山というスポーツが生まれてから、これまで二世紀近い歴史を歩み続けております。ヨーロッパのアルプスに発生したアルピニズムが、はるか極東の島国日本に移植されたのは、十九世紀に達してからのことですが、ヨーロッパのアルピニズム先進国半分にも足りない期間に、日本のアルピニズムは根強い発展を遂げるようになってきました。わずかなあいだに国内の山々を、あらゆる角度から、しかも四季を通じて登るようになった日本のアルピニストのエネルギーは、いまや世界の山々を舞回り、しかもホームグラウンドのような手軽な活動になっています。

このような盛況を、行動の面からだけ見ておりますと、日本のアルピニズムはいかにも西欧のレベルに迫っていた、あるいは追い越したかのようにも見えます。しかし登山界という社会相互の比較という見方をすれば日本の登山界は、まだまだ先進国の比ではありません。私たちがヨーロッパのアルプスを中心とする諸国で登山経験を積めば積むほど、反響がつかえつていっせいの問題点がありました。いまこの辺りでは登山に投済する余裕がなこのべ、それらを「アルピニズムの後進性」といって言葉にまとめようと思っております。その後進性の原因となっているのは、これまでわが国の登山界が登山におけるプロフェッショナルな社会を未開発のままに残ってしまった過失であります。

学業でも、スポーツでも、人間の文明が生み出した社会の、この辺りの部分をいってあげても、専門分野の確立なしに進歩発達を遂げたものはあつてはなりません。

西欧の登山界が、早くからアルパイン・ガイドの名のもとに登山のエキスパートによるプロフェッショナルな社会を築き、プロの権威と責任ある行動を推進力としてアルピニズムを発展させてきたことは、登山界をむかへても無く明らかな事実であります。

西欧のアルパイン・ガイドはアルピニストを正導へばかりではなく、登山技術の研究者であり、登山技術の教師であり、登山用具の研究開発者であり、あるいはアルピニズム社会の組織者であり、管理監督者である。ところが登山界のあらゆる分野で重要な役割をしようとしている現実、それを他山の石として、いま私たちは遅ればせながら日本のアルピニズムにプロフェッシ

ヨナルな社会を創立し、空田を埋めるべく結集しました。

「これまで私たちがおこなってきた、より厳しい対象を求めての登山行動は、すべてアルピニズム自身の練磨に集約するものでありましたが、その経験をもとに、これから日本のアルピニズムの充実した発展と、登山社会の繁栄のために行動したいと思えます。」(支援、協力を御願いたします。)

創立 一九七二年 四月 十三日

奥山 章

青木 洋 飯塚 誠一

~~遠藤 二郎~~ 大倉 大八

小森 康行 桜井 正巳

高田 光政 次田 経雄

古川 純一 堀田 弘司

湯浅 道男 吉尾 弘

芳野 満彦

〔アイウエオ順〕

(注) 実際の原本は、和文タイプで記述されている。

遠藤二郎の箇所は、作成後に取り消されたペンの跡が見える。